

月初めにはハンブルクでG20が開かれ、その影響で中央駅の近くはほぼ全面通行止め、一部の地区でデモが起こったり、スーパーの窓が割られ荒らされたり、という予期せぬ騒がしさに見舞われました。サミット後には地元の人たちによって街は修復され、週明けには街は平穏と取り戻していました。日本でサミットが開かれたとしても、このような騒ぎになることはまずないので、EU諸国から人が自由に入出入りできるという地理的特徴と国民性の違いが影響しているのかも思いました。

さて私は大学での授業も今月中旬で全て終了し、いよいよ留学も終盤に迫ってきたと感じています。夏季休暇に入ってから、平日は図書館や近くのスポーツ施設に通ったりして、週末には少し遠くへ足を運ぶ、というような生活をしています。今月は、大学で行った発表からドイツのParallelgesellschaft（並行社会）についてと、ドイツでの夏休みの様子をお伝えします。

異文化理解の授業から—Parallelgesellschaft（並行社会）—

ドイツ（特にハンブルク）では、移民背景を持つ人が多く住んでおり、その数は4人に1人とも言われています。それだけ移民の数が多ければドイツ社会のなかに、様々な集団が生まれます。トルコ人社会をはじめ、ポーランド、イスラム、アジア圏の社会も存在しており、そしてそれらはドイツ社会と交わることなく、並行にある社会として存在することもあります。私は、ドイツの並行社会の現状を元に、移民背景を持つ人が増えていくであろう日本の将来のために、何かヒントが得られるのではないかと考えました。

ドイツ社会と交わらないと聞けばネガティブな印象を受けますが、ドイツで並行社会に属することは、個人レベルでは必ずしも悪いことでもないようです。移民の中でも割合が多いトルコ人を例に出すと、ドイツに住んでいながらドイツの歴史や文化を意欲的に学ぼうとはしなくとも、家ではトルコ人の家族と過ごし、学校や職場でトルコ人の友人と付き合っている社会のなかで生きていけるからです。ですが国レベルで考えれば、政府は移民社会とドイツ社会を統合したいと考えています。そのため義務教育ではDeutsch als Zweite Sprache（第二言語としてのドイツ語）という科目がある上に、ドイツ人でなくとも5年以上ドイツに住み、ドイツ語の基準をクリアし、ドイツの歴史や文化についての知識を問うテストに合格すれば永住権を得られる仕組みも整っています。

様々な見解がありますが、やはり並行社会に属している本人が、自分の意思でそうしているのか、並行社会に属せざるを得ないのか、というのが大きなポイントだと私は感じました。ドイツ政府は、彼らがドイツ社会に入れるような仕組みを整えているため、彼らはいわば「選べる」環境にあるとも言えます。対して日本は、同じく多様な並行社会が存在しますが、教育面だけをとってみても、第二言語としての日本語は義務教育に組み込まれてはいません。日本において、「選べる」環境を増やしていくことが、日本人であれ移民背景を持つ人であれ、一人一人の生き方を認め、尊重することに繋がっていくのではないかと考えます。

Düsseldorf „EURO JAPAN “

今月の半ばにはデュッセルドルフにて、ヨーロッパ在住日本人によるサッカー大会が開かれました。私が留学当初から所属しているハンブルクのチーム“FC Reeperbahn”も毎年本大会に参加しているので、私も。ドイツのチームを中心に、フランスやベルギー、イギリス、などから全 23 チームが参加しました。アマチュア向けの大会といっても、流石はドイツ。こんなに綺麗な天然芝の上でボールを蹴っても良いのか、と思うほどの絶好のピッチでプレーすることができました。私たちのチームは上位入賞にはなりませんでした。ヨーロッパ各国から集まった人々と試合をすることはなかなかないので、いい経験になりました。大会で奮闘した後、味わった日本食が体に染みわたったのは言うまでもありません。



東ドイツへの小旅行

月末には、Dresden を経由して Sächsische Schweiz(ザクセン・スイス)という東ドイツにある山と、友人の実家がある Halle という小さい町へ旅をしました。電車に揺られながら 6 時間ほどかけて行っただけですが、東ドイツに近づくにつれて、窓からの景色が少し変わって見えることに気づきました。ハンブルク周辺とは違い、駅も住宅街もどこか古さを感じさせるものが多く、その建物だけを見ていると時代を遡ったような気分になるほどでした。



そして旅の一番の楽しみであったザクセン・スイスでは、息をのむほどの綺麗な景色を味わうことができました。登るためにはまず最寄り駅から少し歩き、山を登るためにフェリーで向こう岸に渡ります。砂岩と森林によるマイナスイオンを感じながら登ること小一時間で、山頂にたどり着きます。上から見ると、左手にはエルベ川、右側には立派な砂岩が立ち並び、遠くには風車や牛が見えました。港町のハンブルクにはなかなか味わえない、緑がどこまでも広がる景色に癒され、いつまでもそこに居ることができるくらいでした。



来月はデンマークと、ドイツにある Sylt という所へ行って、今度は海に癒されに行こうと計画しています。それまでは、図書館での卒業論文に関する資料集めを頑張ります。